

# 古代日本語の船舶の名称における異文化の要素について—「石走る垂水」を中心に—

黄 當 時

## 1. はじめに

『万葉集』1418の歌に、

志貴皇子の權<sup>1</sup>の御歌一首  
石<sup>いは</sup>ばしる<sup>2</sup>垂水<sup>たるみ</sup><sup>3</sup>の上<sup>うへ</sup>のさ蕨<sup>わらび</sup>の萌<sup>も</sup>え出づる春になり<sup>4</sup>にける  
かも

があり、中西進（1980）は「1 新春の賀宴に祝意を述べる趣で題詠された歌。卷十三卷頭歌と同種。2 激流の形容。3 滝のこと。普通名詞。4 発見の意がある」と語句に注を付し「岩の上をほとばしる滝のほとりのさ蕨が萌え出る春に、ああなったことだ」と口語訳している（p.167）。原文は、石激 垂見之上乃左和良妣乃 毛要出春尔 成来鴨。

ワラビ（蕨、学名：Pteridium aquilinum）は、山地の日当たりのよい乾燥地に群生するシダである<sup>101)</sup>。滝の近辺は、湿度が高く、気温が低い場合が多いため、ワラビの生育に適した環境ではない。ワラビの好む生育環境からは、この「垂見」を「滝」と解釈してもよいのかという疑問が生じる。小さな雪解け水の流れならいざ知らず、水量の多い滝の近辺と考えることはまずできない。また、この歌の原文表記は「垂見」であり、「滝」は、歌のどこにも登場しない。多くの読み下し文では<sup>102)</sup>、垂見

●を垂水に書き改めることで、垂れ落ちる水すなわち滝があったと見せかけてはいるが、原文中に滝はない。志貴皇子が目にした早蕨<sup>さわらび</sup>は、どこか日当たりのよい乾燥地に群生していたのではないのだろうか。

石走<sup>いは</sup>るは、名詞＋動詞の構造である。名詞＋動詞の構造では、名詞はその直後の動詞の動作主であるのが一般的である。中西（1980）の訳のような、名詞で示される場所で（何かが）動作をしている、というあまり一般的でない解釈をする前に、まずは一般的な用法を検討すべきであろう。

志貴皇子は、石<sup>いわ</sup>が走る、つまり、石<sup>いわ</sup>（と呼ばれる物体）が横方向にある程度の速度で移動する、という意味で歌を詠んだのではないだろうか。「石走る」はこの歌が詠まれた頃の人々にとっては極普通に使う言葉であったはずなのに、後世の私たちには、正確な理解ができない。「石走る」は、その一部がいわゆる海の民の言語であり、私たちを含め、後世の人々は、海の民の言語に関する知識がないため、その意味が正確に理解できないのではないだろうか。

小論では、管見に入った有用な知見を手掛かりに、言語学的視点から「石走る」の読みと意味を探ってみたい。

## 2. 有用な知見

初めに、船舶の名称について考察しつつ、「石走る」の理解に必要な知識を入手していきたい。

古代日本語における船舶の名称については、言語学的視点からの研究は貧弱で見るべきものがほとんどないが、二人の研究者が「枯野」船解明の過程で有用な知見を示している。

先ず、茂在寅男氏は、人間は有史以前から驚くほどの広範囲

にわたって航海や漂流によって移動していた、と考えている。その研究は、日本語の語彙にも及び、『古事記』や『日本書紀』が成立した頃は、ある種の高速船を「カヌー」または「カノー」と呼んでいたもので、その当て字として「枯野」（『古事記』）、「枯野、軽野」（『日本書紀』）が使われたのではないか<sup>201)</sup>、と推論している。現在の「カヌー」という言葉は、コロンブスの航海以後にカリブ海の原住民から伝えられたアラワク語が元で、さらにその語源をたどると北太平洋環流に関係してくる、と言う。そして、『記』『紀』の中に古代ポリネシア語が多く混じっている、と述べ、様々な例を挙げるが、「枯野」については、具体的な手掛かりを示さなかった<sup>202)</sup>。その説は、重要な問題提起であった。

次いで、井上夢間氏は<sup>203)</sup>、「枯野」等の言葉とカヌーとの関係について、種々の事例を紹介しつつ、基本的で重要な事柄を次のように簡潔に説明している<sup>204)</sup>。

私も大筋としては同じ考えですが、茂在氏がいささか乱暴にこれらの語を一括して同一語とされているのに対し、私はこれらはそれぞれ異なった語で、ポリネシア語の中のハワイ語によって解釈が可能であると考えています。

カヌーは、一般的にはハワイ語で「ワア、WAA」と呼ばれます（ハワイ語よりも古い時期に原ポリネシア語から分かれて変化したとされるサモア語では「ヴァ、VA'A」、ハワイ語よりも新しい時期に原ポリネシア語から分かれたが、その後変化が停止したと考えられるマオリ語では「ワカ、WAKA」）。しかし、カヌーをその種類によって区別する場合には、それぞれ呼び方が異なります。

ハワイ語で、一つのアウトリガーをもったカヌーを「カウカヒ、KAUKAHI」と呼び、双胴のカタマラン型のカヌー

を「カウルア、KAULUA」（マオリ語では、タウルア、TAURUA）と呼びます<sup>205)</sup>。ハワイ語の「カヒ、KAHI」は「一つ」の意味、「ルア、LUA」は「二つ」の意味、「カウ、KAU」は「そこに在る、組み込まれている、停泊している」といった意味で、マオリ語のこれに相当する「タウ、TAU」の語には、「キチンとしている、美しい、恋人」といった意味が含まれていることからしますと、この語には「しっかりと作られた・可愛いやつ」といった語感があるのかも知れません。

これらのことからしますと、『古事記』等に出てくる「からの」または「からぬ」、「かるの」は、ハワイ語の「カウ・ラ・ヌイ」

KAU-LA-NUI (kau = to place, to set, rest = canoe; la = sail; nui = large)、「大きな・帆をもつ・カヌー」  
「カウルア・ヌイ」

KAULUA-NUI (kaulua = double canoe; nui = large)、「大きな・双胴のカヌー」の意味と解することができます。

また、「かのう」は、ハワイ語の「カウ・ヌイ」

KAU-NUI (kau = to place, to set, rest = canoe; nui = large)、「大きな・カヌー」の意味と解することができます。

以上のように、記紀に出てくる言葉で日本語では合理的に解釈できない言葉が、ポリネシア語によって合理的に、実に正確に解釈することができるのです。

井上氏の知見は、従来不明であった事柄を言語学的に説明したもので、私たちの研究に突破口を開くものであった。氏の画期的な知見により、私たちは言語学的な根拠を持って古代日本語における船舶の名称について考察することができるようにな

ったのである。氏の知見が私たちの研究の新たな礎となることは、間違いない。

中でも、双胴のカタマラン型のカヌーをマオリ語では、タウルア、TAURUAと呼ぶという指摘は、「垂見/垂水」を正確に理解するうえで、重要な手掛かりなのである。

### 3. 鳥を舶載する船

#### 3-1. あまのとりふね 天鳥船、あまのはとふね 天鵠船、あまのいわふね 天磐船

『日本書紀』には、同じ構造で言及される船が三船ある。

『日本書紀』（神代下、第九段、一書第二）に「またお前が往来して海で遊ぶ備えのために、高橋・浮橋と天鳥船あまのとりふねも造ろう」<sup>311)</sup>とあり、小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守（1994）は、「天鳥船」に「ここでは水鳥あまのとりふねの船。鳥は他界（海は他界）と往来すると考えられていた」と頭注を付している（p.135）<sup>312)</sup>。

この頭注は、「天」を解釈することなく、「天鳥」を「水鳥」と解釈しているようである。「海は他界」というのは、陸の民の発想であり、海の民のそれではない。

次に、『日本書紀』（神代下、第九段、正文）に「そこで熊野の諸手船に〔または天鵠船という〕、使者の稲背脛を乗せて遣わし、高皇産霊の勅を事代主神に伝達し、またその返事を尋ねさせた」<sup>313)</sup>とあり、小島他（1994）は、「天鵠船」に「天上を鳩のように早く飛ぶ意。「鵠」は享和本『新撰字鏡』に「也万波止」。記は天鳥船神を遣わす」と頭注を付している（p.117）<sup>314)</sup>。

鵠ハトは、鳥類の中でもさして速く飛ばないため、飛行速度が速いという比喻に用いるのには、適当ではなかろう。海の民は、

実際には、私たちにわからない何か重要な理由で鵠を用いていた可能性がある。解釈者諸氏に限らないが、古来、鳥類についての知識があまりないまま、辻褄合わせ程度の解釈がされてきたのではないだろうか。

さらに、『日本書紀』（神武天皇、即位前紀）に「すると、『東方に美しい国があります。四方を青山が囲んでいます。その中に、天<sup>あまの</sup>磐<sup>いわ</sup>船<sup>ふね</sup>に乗って飛び降<sup>くだ</sup>った者がおります』と言った」<sup>315)</sup>とあり、小島他（1994）は、「天磐船」に「天上界の磐のように堅固な船」と頭注を付している（p.194）<sup>316)</sup>。

「天」を「天上界」と解釈しているが、この解釈で正しいのだろうか。磐船は、磐(の)船、という意味であり、磐(の)ように堅固な船、という意味ではなかろう。水に浮かばない岩石を船の堅固さの比喻に用いるのは、第二例の、鵠が速く飛ぶ、以上の不自然さを覚えざるをえない。

以上のように、「天鳥船」「天鵠船」「天磐船」の「天」は、他界、天上(界)と解釈されている。しかし、「天」には、他界や天上(界)以外に、この三船に共通するような意味はないのだろうか。

磐<sup>いわ</sup>は、やや異質なものに見えるものの、鳥や鵠に共通する何らかの意味を持っている可能性がある。

### 3-2. アマノイワフネ

茂在寅男氏は、天について、次のように述べている<sup>321)</sup>。

……アマというのは、天、海の両方の意味にとれる、冠語的な形容詞であるといわれてきた。そして『日本書紀』の文脈のなかでは、それもいちおうはうなずける解釈であった。しかしこの場合、「天」という漢字からいったんひきはなして、AMAの発音だけで考えると、つぎのようなポ

リネシア語の意味が浮かびあがる。

アマ＝カヌーのアウトリガーという腕木の先についている浮木<sup>フロート</sup>。すなわちカヌーのアウトリガーについている縦方向の木。

AMA= Outrigger float; the longitudinal stick of the outrigger of a canoe.<sup>322)</sup>

アウトリガーのフロートというのは、カヌーの転覆をふせぐためにつけられた、かんたんな装置である。カヌー本体の横から何本かの細い腕木を出して、その先に、船型の浮木をつける。浮木の長さは、長いもので本体の八割にまで及ぶこともある。

なお「記紀」に「冠詞」として数多く出てくる天<sup>アマ</sup>という言葉、なぜこの場合だけアウトリガーと解するのか、という疑問も出るはずである。しかしカエルという言葉がゲコゲコ鳴く動物だけでなく、帰る、変える、の意味を持つこともある。どこの国の言葉にも、いくつか複数の意味をもつ同表音の単語、多義語が多数存在している。

この事情は現代も古代も、さほど変わりがないであろう。さらにアマノイワフネの場合、とくに海または船に強く結びつく点で、AMA＝アウトリガーの浮木説を採用しても無理ではないと思うのだが、いかがだろうか。

天<sup>アマ</sup>については、茂在氏の推論が成立すると考えてよい。私たちは、漢字の表意機能に目を奪われ、自由に思考することを止めてしまいがちである。このケースでも、私たちは、つい、漢字は意味を示している、と考えてしまいがちだが、この天<sup>アマ</sup>は、例えば、天麩羅や天井<sup>テン</sup>の天と同じく<sup>323)</sup>、アマという外来語の音

声情報を書き記したものであり、天（天空、sky）の意味はない。  
次は、鳥、鴿、磐、である。この三者は同類の情報を伝えている可能性がある。

鳥や鴿は、字面の通り、鳥や鴿と考えられる<sup>324)</sup>。一方、「磐」は、現代日本語では鳥の意味を持たないが、鳥、鴿、磐、の三者が同類の情報を伝えているのであれば、「磐」は、イワという名称の鳥、ではないだろうか。

茂在氏は、磐について、次のように述べている<sup>325)</sup>。

しかし「イワ船」のイワを、文字どおり「岩・石・磐」の意に解釈するには、疑問が最後まで残る。岩の船は水に浮かばないからである。これらの言葉は「いい伝えられた言葉」を、単に文字に表現して記録したもの、つまり「当て字」と考えるべきなのではないだろうか。

したがって問題は、アマノイワフネという表音である。……イワという発音に、何か手がかりはないかどうか。とくにイワが何か船にかかわるとすれば、それが第一歩となるはずである。

私は、あるとすれば、黒潮によって移入した南方系の言語であると考えてきた。したがって、できるだけ古代に近い、古い南方系の諸語属を、いちいちあたってみることにしたのである。

私は、……。

……。

現代ハワイ語の辞書のなかに、古代ポリネシア語などの表音が併記されている一冊があった。そのあるページに、めざす言葉があった。イワ‘IWAがみつかったのである。そしてその意味は、軍艦鳥であった。



‘IWA=Frigate or man-of-war bird.

鳥で方角を知る船

イワ＝軍艦鳥。これは単なる偶然だろうか。鳥はむかしから、航海に欠かせない動物であった。そのなかでもとくに軍艦鳥は、「航海の案内鳥」として、むかしからポリネシア人によって、南方で利用されていた鳥である。

この鳥は、巣を島の木の上に作る性質がある。朝早く島を飛び立って、夕刻に島へ帰り、昼の間は長時間海の上を飛びつづける性質をもっている。このため、朝夕の飛行方向から、島の存在を船乗りに知らせてくれるのである。主として熱帯の海に住み、カツオドリなどの海鳥から食物をまきあげる習性がある。黒色、翼が長く、片羽約五十センチ。全体としては日本の鵜うによく似ている。

もしイワフネを「軍艦鳥の船」と解するならば、「軍艦鳥によって方向を定める船」の意味になるだろう。『古事記』のイワフネ、『日本書紀』のイワクスブネのイワは、こう考えると、きちんと船に符合する言葉である。

鳥をもちいた航海術は、古代から広く行なわれていた。日本においては、軍艦鳥の役割はカラスなどにかえられた。陸が見えないほど遠い沖に船が出ってしまった場合、カラスなどを放してやって、それが飛んで行く方向、すなわち陸地の方向をみつけ出したのだと考えられている。

ここで問題となるのは、イワをハワイ語の‘IWAにそのままおきかえていいのかどうかである。かりにイワを「正確」にローマ字で表マにするとすればIWAとなる。このIWAと‘IWAとは、完全に同じ発音ではないのである。

IWAの前に ‘ がついていても、日本語で書けばイワとしか書けないのだが、専門的にはこのイは声門閉鎖音がとも

なう「イ」である。これをさらに古代ポリネシア語にまでさかのぼると、KIWAつまりキワという発音になる。だから、イワフネではなくて、キワフネでなければならない、という議論が生ずるであろう。

しかしキワがイワに変わったのは何世紀ごろか、また、たとえ「記紀」以前にキワだったとしても、当時の倭人にはイワとしか聞きとれなかったのではないか、などの問題提起をし……。

茂在氏の推論は、古代日本語における船舶の名称の解明にとって極めて重要な手掛かりである。

「磐」は、「IWA」（Frigate or man-of-war bird、軍艦鳥）という音声情報を漢字で書き記したものであろう。

茂在氏によって、天鳥船、天鵠船、天磐船が、「アウトリガー・フロートを持ち、陸地や島の方向を確認するための鳥を舶載する船舶」ではないかという手掛かりが得られたのである。

### 3-3. トリノイワクスブネ

ここで、言語的考察が一部間違っているが、茂在氏が船材について述べた文章をもう一つ見ておきたい<sup>331)</sup>。

……アマノイワフネとは、ポリネシア語的に解釈すれば、「アウトリガー付きカヌーの鳥船」ということになる。

かんたんに鳥船と書いてしまったが、前にも述べたように、むかしの航海術では鳥を切り離して考えられなかったらしい。福岡県のめずらしづか ママ珍塚古墳の壁画には、船首に鳥がとまっていることや、「記紀」には数多くの「鳥船」の語が出てくるので、おいおい理解されるものと思う。

つぎに『古事記』の「鳥之磐楠船」についてである。

『古事記』には、つぎのように出てくる。「鳥之石楠船神、  
またの名は天鳥船あめのとりふねといふ」

天鳥船についてはつづいて述べるが、この「楠船」が問題である。私は現在の段階では、あとであげる各種言語の混交合成の例から、これを日本語の楠で造った船と考えている。ひとつには「楠」の字がそれ自体、「クスの木」という強い意味を指し示すこともあり、楠が船材に適していることもあって、右のように考えるしだいである。

したがってイワを「鳥」とポリネシア語義で解釈すれば、「楠製の鳥船」となる。ただしこのとき、正確にはトリノイワクスブネであるから、「トリの楠製の鳥船」となって、鳥が二重になってしまう。

このようなことは、……。

しかしここで、さらにもう一段深く掘りさげた考察も、できるのではないだろうか。私はトリという表音に注目したのである。

古代ポリネシア語で「トリ (TOLI)」というのは、現代ハワイ語では「コリ (KOLI)」に変化している。その意味は「木や蜜柑の皮をむく。木の表面を薄くけずって形を整える」という意味である。

この解釈でいくと、「トリノイワクスブネ」は「楠の表面をけずって形を整えた船」という翻訳も成り立つ。このかぎりでは少なくとも、「磐の船」とか「石の船」など、水に浮かべる実用船としてありえない解釈よりも、よほど現実性がある。

また、「磐のように堅い楠」などもありえないのである。楠の木には楠の木独特のやわらかさが、最後まで残っている。コクタンやリグナンバイタという木ならばともかく、あくまでも「磐のように堅い」の形容は、楠に関するかぎ

り不自然と考えるが、読者のご意見はどうであろうか。

こうなると、イワクスブネの別名「アマノトリフネ」は、「木をけずって造ったアウトリガー付きカヌー」となって、これまたいへんスムーズである。とくに無理のない解釈であろう。

どこが間違っているか、おわかりになったであろうか。

茂在氏が、鳥が二重になってしまう、と誤解した個所において、「トリノ」は、「フネ」にかかっているのではなく、「イワ」にかかっている。原文表記をよく見ればわかることであるが、「トリノフネ」ではなく、文字通り「トリノイワ」という意味なのである。

茂在氏は、*toli (koli. vt. To whittle, pare, sharpen, peel; to trim, as a lamp or the raveled edges of a dress; to shave, as hair)*<sup>332)</sup>という単語に拘泥するあまり、「木や蜜柑の皮をむく。木の表面を薄くけずって形を整える」という意味を提示しながら、トリノイワクスブネのトリを「楠の表面をけずって形を整えた」と解釈したり、アマノトリフネのトリを「木をけずって造った」と解釈してしまった。

私たちは、既に、天鳥船、天鵠船、天磐船、の三船の意味を解いている。天鳥船の鳥は、文字通り、鳥なのである。

茂在氏が、天鳥船の意味と他船の名称の意味とを整合的に捉えられなかったことは、残念だが、それ以上に惜しまれるのは、「木の表面を薄く削る」程度では、よほど恰好な木材を見つけて来ない限り船は造れないことを承知しながら、その知識を検証に応用しなかったことである。

「磐」は、適切な言語の知識がなければ、岩石の「<sup>いわ</sup>磐」と誤解するのは必至であるが、実は、『記』『紀』には、そのような誤解を避ける工夫が凝らされている。「鳥<sup>●</sup>之<sup>●</sup>石<sup>○</sup>楠船」、

「鳥磬櫂樟船」<sup>333)</sup> という表記は、「石/磬」を岩石の「石/磬」ではなく鳥の「石/磬」にどうあっても紛れなく理解してもらうために、冗長と承知の上で、「鳥之/鳥」という情報を敢えて冠したものである。

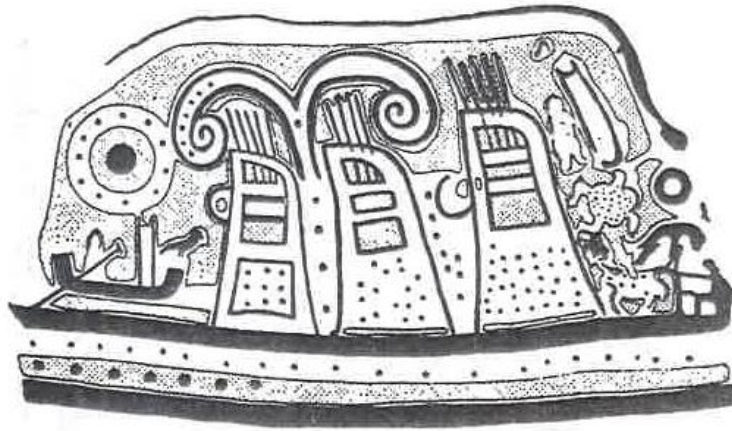
「石/磬」の正確な意味は、恐らく早い段階で人々の記憶から忘れられつつあり、誤解を防ぐためには「鳥之/鳥」という情報を冠することが必要であると判断され、後に言うところの、いわゆる「語部」にそう口伝するよう指示が下されたのであろう<sup>334)</sup>。しかし、残念なことに、後人は、書かれたことの意味を取ることすらできなかった。

### 3-4. 非文字情報

情報には、一般に、目で受容する視覚情報と耳で受容する音声情報の二種がある<sup>341)</sup>。時空を越えた情報の伝達には、テープレコーダ等がない時代にあっては、視覚情報を使うしかないが、視覚情報は、さらに、文字情報と非文字情報(図像や造形など)に大きく分けられ、文字がなかった頃は、非文字情報が利用された。

唐古・鍵遺跡(奈良県磯城郡田原本町)の弥生土器の線刻舟の前方には鳥が描かれている。東殿塚古墳(奈良県天理市)の円筒埴輪には、三隻の大型船の線刻画が描かれ、2号船は、舳先に鳥が描かれている。珍敷塚古墳(福岡県うきは市)の壁画には、舳先に鳥が大きく描かれている。

人々は鳥を船に乗せて航海した。そして、その情報は、土器や壁画に彫られた非文字情報と、語部(集団)によって代々引き継がれ、後に『記』『紀』などの文字情報に変換された音声情報に共通して保存されていたのである。



### 珍敷塚古墳壁画

辰巳和弘『「黄泉の国」の考古学』講談社1996年p. 130

## 4. 石走る垂水

異文化の語彙（外来語）は、その知識がなければ、正確に理解するのが難しい。例えば、「はははほっとにした（母は熱いコーヒーをもらうことにした）」「いまぱとがいたね（たったいま通り過ぎたところにパトロールカーが停まっていたね）」のような文章は、一部に外来語（の略称）が用いられていることを知らなければ、間違った文章、手直しの必要な文章と誤解してしまう。この文章を正確に理解するためには、「ほっと」が「ホットコーヒー（hot coffee）」の略称であり、「ぱと」が「パトロールカー（patrol car）」の略称であるという知識が必要なのである。

『万葉集』292の石船、4254の磐船は<sup>401)</sup>、天磐船の略称であり、更なる略称が「石<sup>イワ</sup>」である。「ホットコーヒー」や「パトロールカー」の略称が示唆するように、日本語は、古今を問わず、

省略表現を好む言語であることが伺われる。古代において「天磬船」も略称（石船や石）が日常的に使われていたと見てよい（402）。

「石走る」は、従来主語が省略されていると考えられ、恣意的に主語に水を補って解釈されてきた。しかし、実は省略されたものは何もなかったのである。「石<sup>イッ</sup>」が天磬船の略称であるとわかれば、「石<sup>イッ</sup>」（天磬船・石船）という「走る」ことの可能な主語が歌の頭に置かれていることがはっきりと見えると同時に、意味も自ずと取れるのだ。

歌が詠まれた頃、「石」が「天磬船」の略称の一つであることは常識であったが、この常識は、その後何故か早い段階で急速に失われ、後人には、理解ができなくなってしまった。

『日本国語大辞典』（第二版第八巻）に、次のような説明がある（p.1168）。

たる-み【垂水】

- ①『名』垂れ落ちる水。滝。瀑布（ばくふ）。
- ②㊦兵庫県神戸市の区名。昭和二一年（一九四六）須磨区から分離して新設された。市の西部にあり、明石海峡に臨む。塩屋・舞子ノ浜などは、古くから白砂青松の景勝地として知られる。同五七年に西区を分区。
- ㊧大阪府吹田市の南西部の地名。

滝の水の動きを垂れ落ちる、と説明するのは不可解である。滝の水の動きは、垂れ落ちるではなく、流れ落ちる、と形容するのが一般的だろう。語感の極めて鋭い一部の人が腑に落ちないと思うことはあっても、多くの人々は、漢字の絶大な表意力

の前に、「垂」と書いてあるから「垂れる」で良いのではないかと考え、不審の思いを持つことすらない。しかし、そろそろ、垂水の垂は、意味を示しているのではなく、音を示していることが理解できるようになったのではないだろうか。

異文化の語彙には、その言語や文化の知識がなければ正確に理解できないものがあるが、小論では、既に理解に必要な知識を入手している。垂は、当時の人々が何と言っていた単語を書き記したものなのか、そろそろおわかりであろう。それは、今日、アルファベットで **taurua**（船-二つ、双胴船）と表記する単語である。漢字しか書けない頃の古代日本人は、この音声情報を、漢字で、垂、と書き記したのである。

志貴皇子の歌の原文にある垂見とは、**taurua**（双胴船）を見かけるところ、のことであり、垂水もほぼ同義で、**taurua**（双胴船）がいたる水面/水域の意である。元は普通名詞であるが、「タルミ」と長年言い慣わされると、それが定着し、固有名詞となる。順序として、「タルミ」という音声<sup>イワ</sup>が先にあって、それを書き記すために「垂見/垂水」という表記が後からできたことは言うまでもない。「タルミ」を表記する時に、**taurua**（双胴船）を見かけるところ、と捉えた者（志貴皇子）は、垂見、と書き記し、**taurua**（双胴船）がいたる水面/水域、と捉えた者（1142、3025の作者。未詳）は、垂水、と書き記したのである。

各地に、たらみ、たれみ、たろみ、という地名がある。鹿児島県中部、大隅半島の北西部に、鹿児島湾に面して垂水<sup>たるみず</sup>という地名があるが、恐らくその由来も同じであろう。

「石走る」の石<sup>イワ</sup>は、「石<sup>イワ</sup>」と呼ばれた船。そして、「垂見」は滝ではなく、垂<sup>タル</sup>（双胴船）をよく見かける所、に由来する垂見地区である。志貴皇子の歌の意味は、そろそろおわかりであろう。



「天磐船（イワ<sup>タル</sup>磐）という名称の鳥を舶載した船）が走っている。（それが見える）この垂見の丘の上に、早蕨が萌え出てきた。ああ、春になったのだな。」

垂見の上とは、垂<sup>タル</sup>という船をよく見かける垂見地区にある小高い丘のような場所であろう。丘の上は、通常日当たりのよい乾燥地で、蕨の生育にも適している。温かい丘の上で蕨はどこよりも早く芽吹き、春の訪れをまっさきに志貴皇子に告げたのである。

この解釈によって、「滝のほとり」とやや無理のある訳をされてきた「垂見之上」を、文字通り「垂見の丘の上」と訳すことができるのである。

ここで、もう一首「石走る」が登場する『万葉集』29の歌を見ておきたい。

近江の荒れたる都<sup>1</sup>を過ぎし時<sup>2</sup>に、柿本朝臣人麿<sup>かきのもとのあそみひとまろ</sup>の作れる歌

…… 石走る<sup>いはばし</sup> 15 淡海<sup>あふみ</sup>の国の 樂浪<sup>さきなみ</sup> 16 の 大津の宮に ……

中西進（1978）は「1 近江大津宮。アフミは淡（あは）海の意。滋賀県大津市。天智六年（六六七）遷都、天武元年（六七二）、壬申の乱により、廃墟となる。2 年次未詳。次の黒人の歌、人麿の二六四、二六六と同時か。……15 岩の上をほとぼしる水の形容。16 樂浪郡」と語句に注を付し「……岩ばしる近江の国の樂浪の地の大津の宮に……」と口語訳している（p. 63）。原文は、…… 石走 淡海國乃 樂浪乃 大津宮尔 ……。（同書 p. 64）

中西（1978）の口語訳は、投げたようにも見えるが、今や、私たちは、柿本人麻呂は、岩の上をほとぼしる水、と脈絡が認められない表現で歌を詠んだのでは決してなく、イワ<sup>イワ</sup>という名称の鳥を舶載する船、即ち天磐船（石船、石）が走る、淡海の国の……、と詠んだのだな、ということが理解できるのではないだろうか。

さらに『万葉集』3025の歌も見てみよう。

石<sup>いは</sup>ばしる<sup>1</sup>垂<sup>たる</sup>水<sup>み</sup>の水<sup>2</sup>の<sup>は</sup>愛<sup>3</sup>しきやし<sup>3</sup>君<sup>4</sup>に恋<sup>こころ</sup>ふらく<sup>4</sup>わが情<sup>こころ</sup>から

中西（1981）は「1 垂水（滝）の形容。2 水の走る一ハシ（愛し）と接続。3 かわいい。原文「早」の用字は水を意識。4 「恋ふ」の名詞形」と語句に注を付し「石の上をほとぼしる滝の水が走る、はしき君に恋することは、私の心からよ」と口語訳している（p.138）。原文は、石走 垂水之水能 早敷八師 君余戀良久 吾情柄。（同書p.138）

「石の上をほとぼしる滝の水が走る」では、作者が何を描写しているのかがはっきりしない。また、「水の走る一ハシ（愛し）と接続」では、恣意的に「水の」を創出することになってしまう。ハシキヤシのうちのハシ二文字（二音節）が、数文字跳び越えて、意味を共有せずに音声のみを共有して、走るにかかっているのではなく、ハシキヤシの五文字（五音節）そのまま、もちろん全く同じ意味で、直前の水と直後の君の両者にかかっている、というのが作者の意図なのである。

中西（1981）は、「水の走る一ハシ（愛し）と接続」と注釈するのであれば、歌の訓みのぼしるを放置するのではなく、きちんとけじめをつけて、はしると訓むべきであったように思われる<sup>403)</sup>。

石走るは、既に見てきたように、文字通り、石<sup>イッ</sup>（石船<sup>イッ</sup>/天磐船<sup>イッ</sup>）が走る、という意味であり、垂水も、**taurua**（双胴船）がいるところ、の意味であろう。歌の意味は「石<sup>イッ</sup>（石船<sup>イッ</sup>/天磐船<sup>イッ</sup>）が走っている、垂見は水面<sup>みなも</sup>や水流が愛らしい、（愛らしい）君に恋をしているよ、私の心から」という意味であろう。

## 5. おわりに

小論では、先達の知見を手掛かりに、さらに、海の民の言語や文化に関する知識を入手することで、「石<sup>いわ</sup>走る」は「天磐船が走る」の意であること、「垂見/垂水」は「双胴船が見える場所/双胴船がいる水域」を意味すること、などを説明することができた。

今日の日本語の中に異文化の語彙が存在するように、古代の日本語の中にも異文化の語彙が存在することが、おわかりいただけたであろう。どの言語にも共通するが、日本語も、一層ではなく、多層なのである。海の民の言語や文化は、日本の言語や文化の基層の一部なのである。古代の日本社会に多様な言語や文化があったことは、是非とも視野に入れておきたいものである。

海の民の視点を取り入れることで、古典の理解や解釈が、より豊かに、より正確になる。私たちは、古代の日本語に取り組むのに、いわゆる日本語の知識にせいぜい中国語や朝鮮語の知識を加えただけのような姿勢でやってきた。しかしこれに加えて、特にポリネシア語等の周辺諸語の知識や、船舶・航海の知識が役に立つという認識は、やがて常識となるのではないか。

【注】

101) 『広辞苑』第五版には、つぎのような解説がある(p.2880)。

わらび【蕨】イノモトソウ科のシダ。山地の日当りのよい乾燥地に群生。早春、地中の根茎からこぶし状に巻いた新葉を出し、これを「さわらび（早蕨）」という。食用。根茎から蕨粉をとる。

102) 中西（1980）に限らないが、原文表記の垂見<sup>●</sup>では、意味が全く取れないため、垂水<sup>●</sup>と表記を変えることで、垂れ落ちる水を経て滝に何とか解釈し、しのいでいるように見受けられる。

原文の表記に手を入れずに読めるなら、中西進氏もそうしたかったことであろうし、そうするよう勧めるであろう。

「垂見<sup>●</sup>」は、表記の通り、垂/タル/たる/taurua（双胴船）がよく見られるところ、の意味である。

201) 『古事記』（下巻、仁徳天皇）の原文表記は、加良奴（荻原浅男、鴻巣隼雄（1973）p.289）、加良怒（山口佳紀、神野志隆光（1997）p.304）。

『日本書紀』（巻第十、応神天皇）の原文表記は、訶羅怒（小島他（1994）p.492）。

202) 茂在寅男1984. p.32。

「枯野」等の解釈に外来語（異文化の語彙）という観点を試みたのは、茂在氏が初めてであろう。

203) 筆名。本名、政行。

204) これは、管見に入った最も有用な知見である。井上氏は、ここでは慎重に、kau = to place, to set, rest = canoeと説明しているが、自身のHP（夢間草廬、<http://www.iris.dti.ne.jp/~muken/>）では、kau = canoeとしている。Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986には、「kaukahi. n. Canoe with a single outrigger float」（p.135）、「kaulua. nvi. Double canoe」（p.137）の例があるので、kauをcanoeと理解するのに問題はない。修飾語がなくとも、

「kau」だけで使われていたであろう。

引用文は、KAMAKURA OUTRIGGER CLUB、

<http://leiland.com/outrigger/column.shtml?kodai.html>.

Copyright (C) 1999-2002 KAMAKURA OUTRIGGER CLUB & LEILAND INC.に掲載されていたが、今は削除されている。

205) 英語では、「l」と「r」は発音が違い、意味が違うが、太平洋諸語では、両者に違いはない。「lua」で書かれていても「rua」で書かれていても（さらには、どの地域にいても）、日本語のラ行音でルアと発音してよく、意味も同じである。

曾て、太平洋諸国・地域での布教の過程で、宣教師たちは、現地の言葉を観察記録していた。各々が持ち帰った記録を突き合わせると、「l」で書き記されたものと「r」で書き記されたものがあり、当初は、発音が違えば意味も違う、と思われたが、最終的に、発音が違うが意味に違いがない、と確認された。簡単に譬えるなら、sakula、kotoliやmisoshilu、lenkon、kuloiと書き記されたものとsakura、kotoriやmisoshiru、renkon、kuroiと書き記されたものは、（字面の通りに読むと）発音が違うが意味に違いがないことが確認されたのであった。

会話では、「l」で発音しても「r」で発音しても支障はないが、辞書を編纂するのに、どちらでもいい、両方載せればいい、という訳にいかず、どの字を使って書くことにするか（どの字は使わないことにするか）、表決（票決、vote）に付された。電話や無線がない頃、各地（各島々）に派遣された宣教師集団間で相談調整されることはなく、結果は、ご覧の通り、ハワイ語は

「l」、マオリ語は「r」、で書かれるが、発音も意味も同じである（日本語は「r」で書かれる）。

Lorrin Andrews 2003にalphabetと題する説明がある（pp.xi-xii）。

.....The consonants, however, presented a different problem. As

visitors to Hawai'i in the first two decades of the nineteenth century gradually discovered, certain consonants varied, not only from place to place, but even from speaker to speaker in the same area.

These were the troublesome groups:

t -- k      b -- p      l -- r -- d      v -- w

In other words, whether a speaker said, for example, *hale* or *hare*, the word still meant house.

Native speakers were consulted again and again, and the results were the same: it simply didn't matter which of the sounds in the group was used.

In the spoken language, this variation presented no difficulties. But for compiling a dictionary, the problem is obvious: how does someone look up a word if there are several ways to spell it?

In 1826, the missionaries put the question to a vote, deciding on *k*, *p*, *l*, and *w* and discarding the other letters, except to write foreign borrowings.

311) 小島他 (1994) の口語訳 (p. 135)。

312) 『日本国語大辞典』は、「天鳥船」を「(「天の」は美称)鳥が飛ぶように速く走る船。あめの鳥船」と説明している (第一巻 p. 543)。

313) 小島他 (1994) の口語訳 (pp. 117-118)。

314) 『日本国語大辞典』は、「天鴿船」を「天鳩船」と表記し、「(鳩のように速く走る船の意)「熊野の諸手船」の別名とされている船の名」と説明している (第一巻 p. 544)。

315) 小島他 (1994) の口語訳 (p. 195)。

316) 『日本国語大辞典』は、「天磐船」を「(「磐(いわ)」は「堅固な」の意) ① 空中を飛行する堅固な船。「日本書紀」では、高天原から下界に降りる際に用いた船として伝えている。

あめのいわふね」と説明している（第一巻p. 541）。

321) 茂在寅男（1981） pp. 60-62。引用の際の省略個所は、……、で示す。以下同じ。

322) Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986は、ama. n. Outrigger float; port hull of a double canoe, so called because it replaces the float、とする（p. 22）。

323) 語源は、諸説あり、『広辞苑』第五版は、「【têmporas<sup>ポルトガル</sup> 天麩羅】（斎時の意。tempero（調味料）からともいう）」とする。天麩羅は、天婦羅とも書かれる。外来語は、元の表記をそのまま採用しない限り、新たな表記をする際に揺れが生じやすいが、その一例である。

324) 鳩は、ハトの総称と理解してもよく、「亀鳩」の略称と理解してもよい。

325) 茂在（1981） pp. 56-59。

331) 茂在（1981） pp. 62-64。

332) Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986.p.163.

333) それぞれ、『古事記』（上巻）荻原他（1973） p. 60、山口他（1997） p. 40、『日本書紀』（神代上、第五段、一書第二）小島他（1994） p. 38。

334) 文字のない時代、生活共同体には、口伝で、一族の歴史や出来事を伝える、後に言うところの、いわゆる「語部」がいた。詳らかではないが、世襲の多かった伝統芸能同様、世襲的に口伝を受け継ぎ、豊富な情報を蓄積したであろう。  
なお、当然のことながら、各地の神話や歴史を、いわゆる「語部」一名（例えば、稗田阿礼、一名）が記憶し口伝することは、不可能である。

『広辞苑』第五版は、語部を「古代、儀式に際して旧辞・伝説を語ることを職とした品部<sup>しな</sup>。出雲・美濃・但馬などに分布」と説明する。（p. 518）

341) 触覚情報に、アン・サリバンがヘレン・ケラーの手に字を書いたことや点字がある。

401) それぞれ、中西（1978）pp.194-195、中西（1983）p.257、参照。

402) 「天鳥船」「天鵠船」「天磐船」等は、ドラスティックに語頭一文字だけの「天」と略されたこともあった。

例えば、『万葉集』876に、天飛ぶや鳥にもがもや都まで送り申して飛び帰るもの、という歌があり、中西(1978)は、大空をかけるよ。その鳥になりたいよ。そうしたら都までもお送りして飛び帰りましょうものを、と口語訳している（p.396）。

一見、そつなく訳され、何ら問題がないように見えるが、そうではない。旅人が利用した交通手段は、言及がないため、水陸不明ではなく、船路であることを、天<sup>アマ</sup>（天鳥船、天鵠船、天磐船）が歌の頭で明示している。歌人は、大空をかけるよ、と唐突な歌い方をしたのではないのである。

この歌は、船<sup>アマ</sup>（天）が飛ぶかのように走っていきます。（私は、せいぜい、船が見えなくなるまでしかお見送りできません）鳥になれたら、都までお見送りして飛んで帰れますのに、という意味であり、船で旅立つ人を見送る歌なのである。

「パ<sup>・</sup>ト<sup>・</sup>ロールカー」が一足飛びに「パ<sup>・</sup>ト<sup>・</sup>」と略されたような言語現象だが、日本語は古今を問わず省略表現を好む言語であることを如実に示す例である。稿を改めて述べたい。

403) 走るに当たる個所の原文表記は、流、激、走、婆之流、等がある。このうち、流、激、の読みは、未詳、走、は、ハシル、を示していようが、婆之流、には、ハシル、と、バシル、の二音がある。



〔参考文献〕

< 日文 >

荻原浅男、鴻巣隼男1973。『古事記 上代歌謡（日本古典文学全集1）』小学館。

角川日本地名大辞典 編纂委員会1990。『角川日本地名大辞典』角川書店。

小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994。

『日本書紀①（新編 日本古典文学全集2）』小学館。

辰巳和弘1996年。『「黄泉の国」の考古学』講談社。

中西進1978。『万葉集 全訳注原文付（一）』講談社。

中西進1980。『万葉集 全訳注原文付（二）』講談社。

中西進1981。『万葉集 全訳注原文付（三）』講談社。

中西進1983。『万葉集 全訳注原文付（四）』講談社。

日本国語大辞典第二版編集委員会、小学館国語辞典編集部2000  
（第一巻）、2001（第八巻）。『日本国語大辞典第二版』  
（第一巻、第八巻）小学館。

茂在寅男1981。『日本語大漂流 航海術が解明した古事記の謎』光文社。

茂在寅男1984。『歴史を運んだ船——神話・伝説の実証』東海大学出版会。

山口佳紀、神野志隆光1997。『古事記（新編 日本古典文学全集1）』小学館。

< その他 >

A. W. Reed & Tīmoti Kāretu, Ross Calman 2001. *The Reed Concise Māori DICTIONARY*, Literary Productions Ltd.

Lorrin Andrews 2003. *A DICTIONARY OF THE HAWAIIAN LANGUAGE*, ISLAND HERITAGE PUBLISHING.

Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986. *Hawaiian Dictionary*, University of Hawaii Press.